# 後編　地獄めぐり

# 一、地獄への道

# I　地獄へ落ちる

そこはロンドンのストランド街だった。その日、俺は例の専売品の調印をすることになっておったので、朝からウキウキして、チョイと一杯機嫌でそこを通りかかったのだった。すると、フイに後ろからバスが来て、俺をひいてしまった。

俺はすぐムクムクと起き上がった。しかし、人だかりがするので、急いでその場を立ち去って役所へ向かった。

役所につくと、俺はすぐドアーをノックした。ところが、手がドアーを突きぬけて、さっぱり音がしない。返事がないので、ままよ、中へ入ってみようと思ったら、いつの間にかスーッと自分の身体が中へ入っていた。

「いや、今日はえらく酩酊したもんだ」

そう思いながら、前を見ると、係の役人が俺を待っている。そばに書記もいる。俺は帽子をとってていねいにあいさつした。

「私は契約書にサインをしに参りました」
すると無礼な奴もあるもんで、俺の方を見向きもしないで、こんな話をしている。
「あと十分待って来なければ、事務所をしめてしまおう」
「このトンチキ野郎！　俺はここにいるではないか」
大声でどなったが、一向に聞こうとしない。それどころか、さんざん俺の悪口を言って、とうとう部屋を出て行ってしまった。あまりの仕打ちに、俺はすっかり怒って、手当たりしだいに、そこらの物をつかんで投げようとしたのだが、それがおかしい。一向につかむことが出来ない。手が物を通過してしまうのだ。「ヒェッ」と、さすがの俺も仰天していると、耳のそばで、「ヒ……」と笑う奴がいる。見ると、ピリーだ。こいつ五年前に死んだ俺の悪友だ。
「何だ、お前、死んだはずじゃないか」
と言うと、
「当たり前さ、とうとうお前もくたばったな」

とぬかしやがる。
「バカめ、俺はちょっと酔ってるだけだ」
「ナニ？　酔ってるだけで、何でドアーを突きぬけたりするんだ。それに、役人にだって、お前の姿は見えなかったじゃないか」
言われてみると、そのとおりだ。
そこで、ピリーのすすめで、一緒に俺の死体を見に行くことにした。
ストランド街に行くと、救急車が来ていて、その中から、死体の臭いがぷんとする。車の中をのぞくと、何ということだ、俺の身体が転がっている。
俺は死体に引きずられるようにして、車について歩いた。病院に着くと、医者は一目見るなり、さじを投げた。
「こりゃ、駄目だ。それにしても見事なやられっぷりだ。これではひとたまりもない」
すると、一緒について来た警官が、
「ナニ、これは本人が一方的に悪いのですよ。なにしろ、へべレケに酔っぱらって、

道の真中を歩いておったのですからな。いやもう、こいつは希代の悪党で、さんざん人を泣かしたもんです。それにしては随分簡単にいったもんだ。どうです、この気楽そうな顔つきは」

俺は思わず、カッとして手を振り上げた。

が、それと同時に、なにやらひどく情けない気持ちになった。せっかく、これから運が向いて来ようという矢先に、このざまとは。畜生！　俺はあたりかまわず、大声でどなりつづけた。

すると、不意に耳の後で、「ヒェッ　ヒェッ　ヒェッ」と、無気味な声で笑う奴がいる。振り返ると、何ともニクニクしい顔をした化物が、俺を見て、口をゆがめて笑っている。

「何だ、お前」ときくと、

「お前の親友だ」

「何だと！」

「まだ、俺が分からんのか。長い間お前をかげから手伝ってやっていたのは、この俺

サマだ」
「……」
「俺は悪を助ける霊魂よ。おかげでお前もタップリ、シャバが楽しめたじゃないか」
俺は、何やら向かっ腹が立ってきた。
「バカ者！　お前がボヤボヤしてるから、せっかくの今日の調印がフイになったじゃないか」
すると、まわりからいっせいに、「ヒェッ　ヒェッ　ヒェッ……」という笑い声が起こった。
いつの間にか、たくさんの化物の顔がならんで、俺の方を見てあざ笑っている。すると、先程の化物の親分が、
「ザマミロ！　最後にお前をひき殺させたのも、この俺サマの仕業さ」
「ヒェッ　ヒェッ　ヒェッ……」
化物どもの笑い声が、まわりの壁に反響して、奇妙にうつろに大きくひびく。

「ヒェッ　ヒェッ　ヒェッ……」

そのうちに、まわりの景色が消滅して、俺は何やら、深く、暗い、冷たい穴の中へと落ちこんで行く。どれほどたったか。俺は無限の空間をすべり落ちていって、最後にゴツンと、何やら地面のようなものにぶっつかった。